

OU-VOICE

岡山大学 ● 教育マガジン

2012

No. 14



- VOICE
- GP紹介
 - ・理学部で「フロンティアサイエンティスト特別コース」開設
- 特集
 - ・岡山大学の外国語カフェ
 - 授業で学んで☆カフェで話して☆世界で活かして☆—
- シリーズ
 - ・卒業生メッセージ
- 投稿

目次

VOICE

世界を舞台に活躍していく岡大生のために ―国際センターの役割―

| | |
|--------------------|---|
| 国際センター センター長 大塚 愛二 | |
| 国際センター 准教授 石沢 祐子 | 1 |

GP 紹介

理学部で「フロンティアサイエンティスト特別コース」開設

| | |
|----------------------|---|
| 大学院自然科学研究科 准教授 味野 道信 | 4 |
|----------------------|---|

特集

岡山大学の外国語カフェ ―授業で学んで☆カフェで話して☆世界で活かして☆―

| | |
|--|----|
| 外国語カフェは、いつ、どこで？ | 6 |
| 日本語で交流「にほんごカフェ Sacra」 | |
| 国際センター 助教 大久保 理恵 | 7 |
| Welcome to the English Café! ―イングリッシュ・カフェのすすめ― | |
| 言語教育センター 准教授 宇塚 万里子 | 8 |
| 中国語カフェ (中文茶房) | |
| 言語教育センター 准教授 加治 敏之 | 10 |
| 韓国語カフェ「이야기 (イヤギ)」への誘い | |
| 言語教育センター 准教授 李 安九 | 11 |
| Deutscher Stammtisch (ドイツ語カフェ) の試み | |
| 言語教育センター 教授 久保田 聡 | 12 |

シリーズ 卒業生メッセージ

岡山での9年間

| | |
|---------------------|----|
| ライト電業株式会社岡山支社 | |
| 2008年 理学部生物学科卒業 張 羽 | 13 |

私の大学

| | |
|------------------------------------|----|
| CANホールディングス株式会社 | |
| 2010年 大学院社会文化科学研究科 比較社会文化学専攻修了 王 薇 | 14 |

投稿

海外の教育紹介

南アフリカの大学

| | |
|--|----|
| 大学院教育学研究科 教授 Thembi Constance Ndlalane | 16 |
|--|----|

| | |
|------|----|
| 編集後記 | 21 |
|------|----|

(注) 役職等は、平成24年3月1日現在のものです。

世界を舞台に活躍していく岡大生のために —国際センターの役割—

国際センター

センター長 大塚 愛二
准教授 石沢 祐子

1. 国際センター？

岡山大学の中に「国際センター」という組織があるのをご存知でしょうか。留学生が所属する組織のこと？いいえ、留学生は各学部や研究科に所属します。

国際センターは、学部・研究科を問わず、留学生や海外で学ぼうとする日本人学生の支援を担う組織です。また大学全体の教育・研究両面での国際交流の推進役でもあります。

今回は、数ある国際センターの活動のうち、日本人学生の留学支援とグローバル人材の育成にスポットをあてて紹介します。

2. 社会が求める「グローバル人材」

国際センターでは、海外で学ぶことや留学生との交流は「グローバル人材」育成につながると考え、今まで以上に力を入れていこうとしています。

この「グローバル人材」という言葉、聞いたことはありますか？新聞等で「最近の若者は内向きだが、企業はグローバル人材を求めている」、「グローバル人材育成のため、A社では若手社員全員に海外経験を義務付けることを決定」といった記事が出ているのをご覧になった方もおられると思います。

「グローバル人材」の定義は定まっていなようですが（文部科学省の定義は右段参照）、ある報告書では、共通して求められる能力として①社会人基礎力、②外国語でのコミュニケーション能

力、③異文化理解・活用力を挙げています^注。グローバル化が進み、ある国や地域だけで物事を考えることができない現在の社会では、世界の情勢や異なる価値観を理解し、それを踏まえた提案をし、また行動することが求められているのです。

「グローバル人材」の定義

日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間。（「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」資料より）

異なる言語、文化、価値を知り、外国語を身につける最も早く効果的な方法は、その中に飛び込んでみることです。日本の地方で、日本人しかいない環境でも、世界を知り語学力を上げることは不可能ではないですが、海外で外国人とともに学び生活すれば、言語や文化をより深く理解し、また異なる意見をぶつけることもできるでしょう。日本人学生向けにそうした機会を提供するのが、国際センターの一つの役割なのです。以下では、「グローバル人材」となるために活用できる国際センターの活動を、在校生のメッセージとともにお知らせします。

注：「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会」報告書による

大倉 涼子さん（文学部4年 タイ・マヒドン大学留学
大手インフラ系メーカー総合職内定）

留学先で文化や考え方の異なる人々と関わる中で、国際交流や国際協力に強い興味を持つようになりました。帰国後も「あらゆる国の人々を知りたい、良く関わりたい」という思いの下に、学内・学外で企画される国際交流イベントや海外研修等に積極的に参加しています。

来春からは志望していたグローバル企業で、また新たに思いを追求することができます。将来に向けて踏み出そうとしている私の原点は留学であると、就職を目前に控えて改めて感じています。



3. 海外の大学で学ぶ—交換留学—

交換留学とは、本学に在籍する期間のうち半年から1年程度をアメリカやイギリス等の海外の大学で学ぶ制度で、本学では「岡山大学短期留学プログラム：EPOK（イーポック）」と呼んでいます。一般には交換留学と呼ばれており、岡大生が海外の大学で学ぶのと入れ代わりに、派遣先大学の学生が本学に学びに来ています。

EPOKにより、毎年約20～30人の学生が岡山大学と協定（全学協定）を結んでいる海外の大学に留学しています。協定校はアメリカ、イギリス、オーストラリア、タイ、中国等にある17校で、この中には、イギリスの名門、エディンバラ大学や工学分野で高名なアメリカのイリノイ州立大学も含まれています。

この交換留学では、英語を学ぶのではなく、英語で専門科目や教養科目を学びます。英米の授業には、他の受講者や教員と議論する機会が多いものもあり、留学には高い英語力が求められます。必要な点数を超えるのにみんな苦労しますが、それだけに得るものも多く、留学を終えて帰ってくる学生はみんな大きく成長し、世界で活躍する企業に就職する学生も少なくありません。

なお、学費は岡山大学に払うので、追加的な経費は往復の飛行機代と現地での生活費のみです。入学時から英語力をさらにアップさせ、教養や専門科目で良い成績をおさめ、チャレンジしてみたいでしょうか。



本学からの交換留学生(左端)とその友人
(ニューヨーク州立ストーニーブルック大学の卒業式当日に撮影)

4. 海外で生活しながら語学を学ぶ —語学研修—

「交換」留学は、前述のとおり高い英語力が必要で、人数にも制限があるため、成績等による選考があります。他方で「専門科目を勉強するまでの英語力はないが、学生の中に一度海外で生活したい」と思う方もおられるでしょう。そういう方にお勧めするのが語学研修です。

国際センターでは、夏休み・春休み合わせて年間3～4回程度、語学研修の機会を提供しています^注。基本的には4～5週間、現地の家庭にホームステイしつつ語学学校に通いますが、入門編と位置付けている Guam 研修は約2週間と少し短い期間です。

Guam 研修では、研修の一部として町でインタビュー等を行い、最後には英語で発表するため、実際に「英語を使う」格好の機会となります。Guam 以外の約1か月の研修コースは、全員現地の家庭にホームステイし、ホストファミリーとの会話はすべて英語です。昼間は語学学校で英語を学び、帰宅し

雲井 秀佳さん（経済学部4年 イギリス・シェフィールド大学留学
外資系コンピューターメーカー コンサルタント職内定）



鉄道で国境を越えたことがありますか？

私は、電車で、イタリアとフランスの国境を越えた瞬間の気持ちの高まりを、未だに忘れることができません。日本では経験できないことをヨーロッパの人はこうやって経験している、と、国によって常識が違うことを実感しました。交換留学の1年間で、世界の広さ・バックグラウンドの多様性を知りました。

また、英語での授業は、英語だけでなく専門科目の内容の難易度にも苦しめられました。しかし、単語を覚えたり教授に相談したりするなど、自ら行動を起こし単位を取得できたことは、大きな自信に繋がりました。

留学で得たものは一言では言い表せません。留学に行かなければ今の自分がいなかったと思います。



イギリス・エクセター大学での語学研修での休憩時間の様子

たらファミリーとの英語でのコミュニケーションが待っています。言語の違いだけでなく、日本での常識が現地では非常識の場合もあります。驚くことや戸惑うことも多いでしょうが、その経験があなたを「グローバル人材」に変えていくのです。

(注) これらの語学研修の経費は自己負担となります。単位認定されるコースもあります。

5. 大学で海外にふれる —留学生との交流—

交換留学や語学研修等で海外に出ることが難しい方は、学内で異文化に触れ、コミュニケーション能力を上げてみませんか？国際センターは、岡山大学に在籍する500人を超える留学生の支援も行っており、その一部は日本人学生の協力も得ています。

例えば来日直後の留学生は、日本の社会等がよくわからない中で、携帯電話を契約したり生活用品をそろえたりしなければなりません。そうした生活立上げ等の支援を主に行うのがチューターです。

チューターの役割を通じ、留学生との考え方や行動の違いに驚く日本人学生も少なくありません。違いがある中で交流していくことにより、異文化対応能力がついていくのです。

また、岡山大学には留学生を支援する「WAWA」というボランティアサークルがあり、留学生と日本人学生の交流を目的に、留学生を歓迎するウェルカムパーティや、バーベキュー等も行っています。学生間の交流では、言語教育センターにも協力いただいております。例えば English Café では留学生と日本人学生の交流イベントが年間に何度も企画・実施されています。こうした機会を利用して、学内でも留学生とのコミュニケーションを深めることができるのです。



交換留学生と日本人学生がともに京都へ旅行(金閣寺前)

いかがでしたか？皆さんがここで紹介した機会を活用し、先輩に続いて世界を舞台に活躍する人材としてはばたくことを期待しています。国際センターも、交換留学先や語学研修プログラム等の更なる充実に向けて取り組んでいきます。

小田 裕之さん (経済学部4年 オーストラリア・アデレード大学語学研修参加
大手繊維メーカー 総合職内定)

私はオーストラリア語学研修に参加しました。そこで経験した海外滞在での不安(言葉、生活等)から、岡大に来る留学生に対して何か役に立ちたいと思うようになり、チューターの活動を始めました。

言葉や考え方の違いで、何度も苦労しました。しかし、日々接するうちに相手の文化を受け入れられるようになり、同時に日本文化の素晴らしさにも改めて気付きました。

この活動で、異なる考えを受け入れる柔軟性が身につく、活動の幅も広がったので、就職活動にも良い影響を与えたように思えます。



理学部で「フロンティアサイエンティスト特別コース」開設

大学院自然科学研究科 准教授 味野 道信

1. はじめに

岡山大学理学部では、新しく「フロンティアサイエンティスト特別コース」を開設しました。

皆さんは、フロンティアサイエンティストと聞いて、どのような人をイメージしますか？現代の混沌とした社会では、新しい価値観を構築するためにも、今までの研究領域に加えて、エネルギーや環境問題などの新しい分野の最前線でも活躍できる研究者や高度専門技術者が求められています。そして、通常の学部教育で身につける知識に加えて、広範囲な自然科学領域での教養、倫理観と判断力、最先端の考えを広く社会へ発信できるコミュニケーション能力などが重要となります。これらの能力を備えたフロンティアサイエンティストを育成することを目標として、この特別コースが開設されました。本コースは、理数に優れた能力・意欲を持つ学生を更に伸ばすことを目的とした平成23年度文部科学省理数学生育成支援事業に採択されています。

2. プログラムの概要

プログラムへの応募資格は、理学部生と理学部で卒業研究を志望するマッチングプログラムコースの学生です。入学後、志望理由書などにより理数分野への学習意欲と学力を合わせて、1学年15人程度を選抜します。選抜されたコース生は、入学した各学科の体系的な専門教育科目に加えて、フロンティアサイエンティストとして要求される能力を更に高めるプログラムを副専攻的に受講することができます。たとえば、学内外の研究施設を活用した「先端科学実習」、英語やプレゼンに関する「科学コミュニケーション」、科学史や科学者倫理そして知的財

産などに関する「フロンティアサイエンティストリテラシー」などを履修します。さらに、後から詳しく説明する「先取りプロジェクト研究」に取り組みます。そのほかにも「ステップアップ合宿」や「英語キャンプ」、「学内外での先取りプロジェクト研究成果発表」などの行事も予定されています。また、これらの学習を支援するために、AA（アカデミックアドバイザー）やTA（ティーチングアシスタント）による研究の個別指導を受け、専用の学習スペースでe-ラーニングを利用することもできます。これらのプログラムで培った知識と経験を生かして、大学院への進学、そしてフロンティアサイエンティストを目指します。

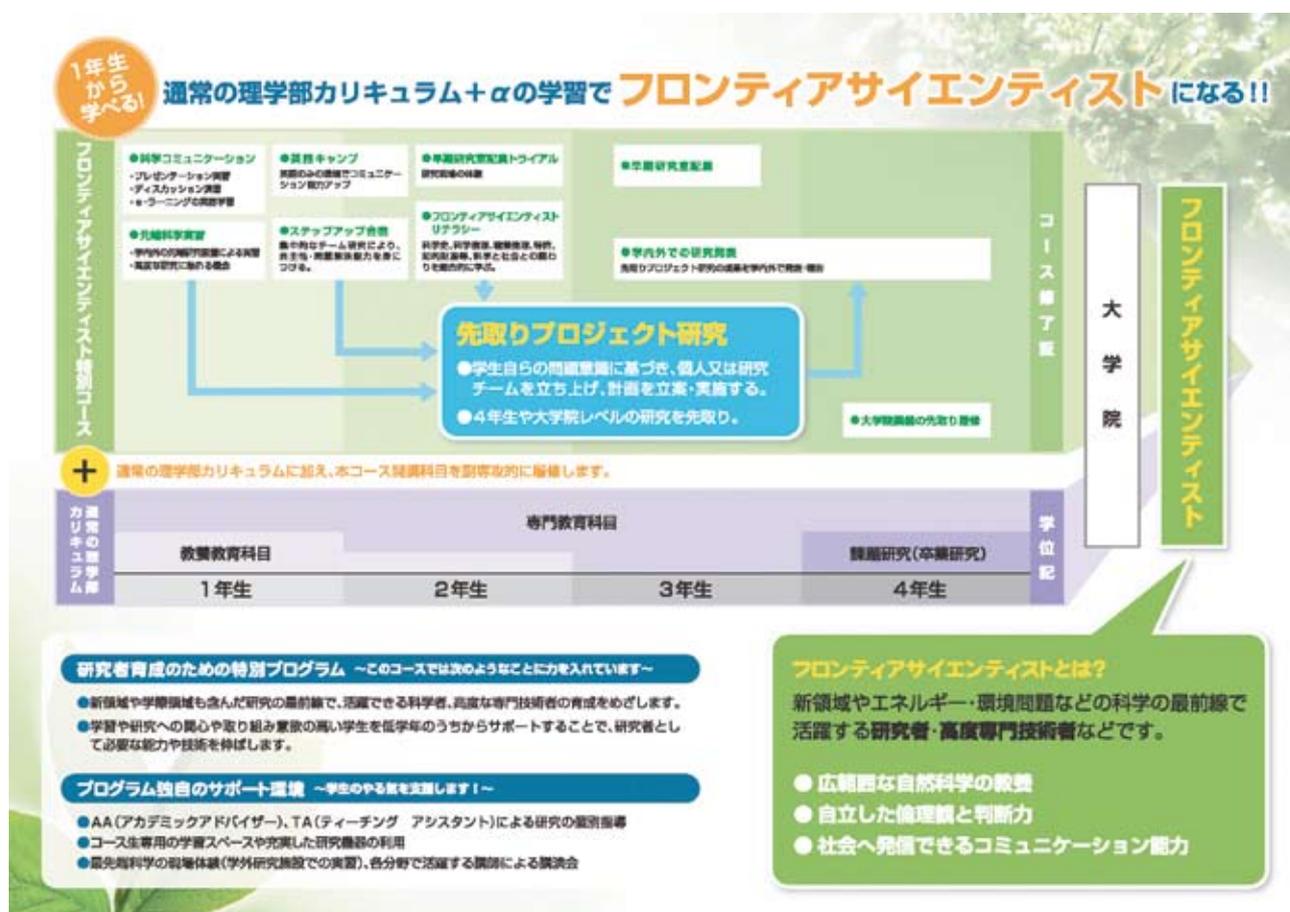
3. 先取りプロジェクト研究

このコースで中心となるのは「先取りプロジェクト研究」です。コース生は、今までの自由研究やステップアップ合宿でのグループ討論を参考にして、興味を持ったテーマに対して自ら計画を立案します。この研究計画をもとに、AAやTAの指導を受けて研究・学習を進めます。プロジェクト研究では、学内外の先進的な研究装置を利用する事ができ、さらに必要な経費等も支給されます。そして、研究成果を学外での研究会やサイエンスインカレなどで発表することを目標としています。このサイエンスインカレは、自然科学分野を学ぶ全国の学生が自主研究の成果を発表し競い合う場として、文部科学省により2011年度から実施されています。

4. おわりに 学生諸君へ向けて

現在、大学で学んでいる皆さんの中には、現状のカリキュラムでは満足できず、より積極的に学びを深めたいと考えている人も多いと思います。

このような学生諸君には、より進んだ学習・研究の場所、カリキュラム、サポート体制が本コースで準備されています。これらの意欲の有る学生を支援する「出る杭を伸ばすシステム」に、積極的にチャレンジしてください。



(図1) フロンティアサイエンティスト特別コースの紹介



◎外国語カフェは、いつ、どこで？

「せっかく外国語を勉強したのだから、実際に使ってみてどれくらい通じるかためしてみたい」という日本人学生。「せっかく日本に来たのだから、日本人の学生とぜひ友達になりたい」という留学生。そんな両者がまずは英語で交流できる場として「イングリッシュ・カフェ」が登場して2年が経過しました。その後本学では、「にほんごカフェ」をはじめ、さまざまな外国語の「カフェ」がオープンし、交流がますます盛んになっています。最初にそれぞれの「カフェ」がいつ、どこで開催されているかをお知らせしましょう。

にほんごカフェ Sacra

と き：毎週火曜日 16:15～17:45

ところ：大学会館「イングリッシュ・カフェ」内

イングリッシュ・カフェ

と き：毎週月曜日～金曜日 10:25～19:00 頃

ところ：大学会館「イングリッシュ・カフェ」内

中国語カフェ（中文茶房）

と き：毎週火曜日・木曜日 16:00～19:00

ところ：一般教育棟C棟4階「教員ラウンジ」（火曜日）

大学会館「イングリッシュ・カフェ」内（木曜日）

韓国語カフェ「이야기（イヤギ）」

と き：毎週木曜日 16:00～18:00

ところ：一般教育棟C棟4階「教員ラウンジ」

ドイツ語カフェ（ドイチャー・シュタムティッシュ）

と き：毎週月曜日 16:00～19:00

ところ：一般教育棟C棟4階「教員ラウンジ」

フランス語カフェ（カフェ・フランセ）

と き：毎週水曜日 16:30～18:00 頃

ところ：大学会館「イングリッシュ・カフェ」内

それでは、どのような交流が行われているのか、「カフェ」の様子をのぞいてみましょう。

日本語で交流 「にほんごカフェ Sacra」

国際センター 助教
大久保 理恵

岡山大学には39の国から542人の留学生が学びに来ています(2011年11月現在)。そんな留学生と気軽に交流できる場の一つが、ここ「にほんごカフェ Sacra」です。2011年後期からは毎週火曜日の16時15分から17時45分まで、大学会館内のイングリッシュカフェ内で活動を行っています。今日は初めて参加した文学部のAさんに感想を聞いてみましょう。

大久保(以下O)：Aさん、初めての参加、どうでしたか。

A：おもしろかったです。日本語で国のこととか好きなこととか話をして、盛り上がりました！途中うまく伝わらなくてちょっと大変だったんですが、紙に漢字や絵を書いて説明したり、簡単な日本語で説明したりして、なんとか乗り切りました。

O：そうですか。スタッフもいますから、困ったときは気軽に声をかけてもみてくださいね。

A：わかりました。そういえば、他のグループで教科書を持ってきている留学生を見ました。

O：そうですね。日本語の勉強を手伝ってもらいたいという留学生もいるようですよ。また、日本語を勉強し始めた留学生にとって、教科書にある練習を一緒にしてもらえるのは、いい勉強にもなりますね。

A：そうなんですか。いつもこんな感じで和気藹々とおしゃべりをしたり、ゲームをしたりするんですか。

O：学期に何回かイベントもありますよ。各国のお菓子をもち寄って、それについて話そうという「お菓子の日」、日本人学生有志による「歌のミニコンサート」などもありますよ。

A：へえ。

O：にほんごカフェは「留学生と交流したい」「日本人学生と日本語で話したい」という日本人学生と留学生の声から生まれました。日本語で気軽に交流でき、お互いの理解を深められる場となることを願っています。また、留学生の日本語の練習にもなるので、留学生の方にもどんどん参加して日本語のブラッシュアップの場として活用してもらえたらよいなと思っています。

A：ええ。これからもぜひ参加したいと思います。

さて、にほんごカフェの様子は皆さんに伝わったでしょうか。もし時間があったら、一度にほんごカフェをのぞいてみてください。新たな出会いが待っているかもしれません☆



和気藹々と日本語で話しています。



Welcome to the English Café!

—イングリッシュ・カフェのすすめ—

言語教育センター 准教授
宇塚 万里子

イングリッシュ・カフェとは？

岡山大学津島キャンパス内、大学会館一階に2009年5月にオープンした、ソーシャル・ラーニングスペースです。岡大生なら誰でも自由に参加できます。(事前登録は不要！)

〈メニュー〉

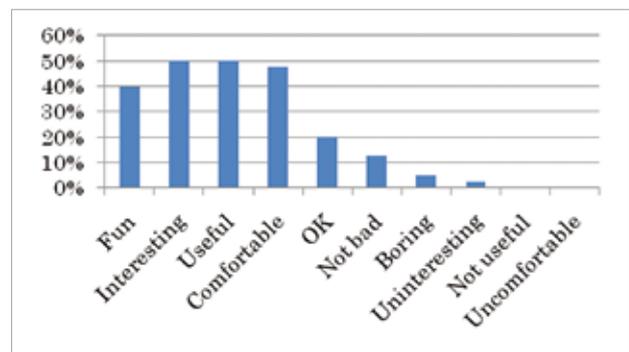
- 留学生や留学経験者と会話やゲームを楽しむフリースペース
- 言語教育センターの英語教員によるオフィスアワー
- 少人数制の英会話やTOEFLのレッスン
- 自由参加型のイベント (カフェにて順次お知らせ)

この他、CNNやBS二か国語放送などのライブ放送や英字新聞、*Time*、*Newsweek*、*National Geographic*などの雑誌、英語語学教材、多読用読本なども楽しめます。

〈岡大生のコメントより (2010年度学生アンケートより)〉

- イングリッシュ・カフェ全般についての満足度 (5点満点) 4.16
- レッスンについての満足度 (5点満点) 4.58
- 友達はできましたか？ Yes 95%
No理由：もっとカフェに来ればよかった、自分から話しかけるのが苦手、等
- 英語又は日本語は上達したと思いますか？
Yes 70% Maybe 17.5% No 12.5% (全て留学生)

- カフェの全体の感想を表現するとしたらどの言葉が適切ですか？ (複数回答可)



英語を上達させる VS 留学生と友達になる

イングリッシュ・カフェで マネージャーをしていると、「英語は興味があるけれど、イングリッシュ・カフェは敷居が高い」(わかる、わかる。僕も最初はそうじゃった)、「もう少し英語ができるようになってからカフェに来よう、と思っていた」(気持ちはようわかるけど、それじゃいつまでたってもカフェに来れんでしょ)「岡大内で雰囲気が違う」「知らない人が多くてコワイ」(確かに…でも、外見は違うけど、留学生は噛みつきやせんよ!)「カフェにいる日本人は、みんな留学とかしてて英語がペラペラな感じ」(うーん、微妙)「上級生は今さら入りにくい」(入ってみんと、わからんが)「見えない国境がある」(ぜひ、パスポートを持参してください!)など、という声を聞きます。

注：()内は英語が苦手な先輩 (4年生、岡山出身) のコメントです。

実際、外から中の様子をうかがっている学生もよく見かけます。そんな時は声をかけに行きますが、「今、約束があるから…」などと逃げられてしまうこともしばしばです。カフェに来るきっかけは、レッスンに参加、友達に誘われて、先生に勧められて、留学について知りたかった、とそれぞれ違いますが、岡大内でもっとも“国際的なカフェ”に足を踏み入れるには、勇気がいると思います。しかし、トライしてみてください。

「英語って興味があっても行動しないと何もならないし、逆に行動してみるとその後はなんとかなる」

by複数の先輩達。

カフェに来て、留学生の隣に座るだけでも、異文化交流の一步です。意外とシャイな留学生もいるし、おしゃべり（うるさい？）な人もいます。母国語が英語という留学生もいるし、何か国語も話せる人もいます。親切でフレンドリーな人もいれば、少々わがままで気分屋な人もいるし、まじめで優秀な人もいます。場所もよくわからない国から来た人や自分も行ったことのある国から来た人。岡大キャンパスは広いけれども、世界はもっと、もっと広い！そして、英語が話せるようになると、その広い世界のことが身近に感じられるようになってくる。キーワードは英語。

「私は、語学の才能がないから」という声を聴きますが、才能がある人の方が稀です。だから、英語が得意な人も苦手な人も、まずは、勇気をもって、カフェに足を踏み入れてみてください。そこから何かが始まるかもしれません。（ちなみに、2010年度TOEIC平均スコア-Upは100.5点）

イングリッシュ・カフェには色々な学生がいます。それは、逆に言うと、どんな学生もWelcomeです。国籍も学部も学年も違った岡大生にぜひ、会いに来てみてください！

「異文化を学べたり、友人もできたり、英語の上達にもつながり、とてもよかったです。」「英語が自然に聞こえてくるのでよかったです。でも、外国人の方の会話は聞き取れなかった。」「雰囲気が明るいし、その場にいる人が声をかけてくれる」（学生アンケートより）



英会話レッスン



フリータイム



岡大七タフェスティバル

中国語カフェ (中文茶房)

言語教育センター 准教授
加治 敏之

中国語カフェ (中文名：中文茶房) は、2010年から毎週2回 (火曜・木曜の夕方) 開かれています。中国語の授業は履修者が多く、授業中に質疑応答や発音の個人レッスンを行うのが難しいため、補習的な時間として中文茶房を設けることにしました。

多くの中国人留学生やネイティブの先生の参加も得られ、ゆったりした雰囲気の中で、教科書の復習をはじめとして中国各地の話、旅行や留学のアドバイスなどに加えて、留学生に日本語のニュアンスを説明したりと、相互学習の場として定着しています。

中文茶房の特色は、本場の中国茶が飲めることです。飲茶の風習は中国文化の精髓の一つですが、茶葉の種類も飲み方も多様で、気軽な飲み方もあります。中文茶房では自由にお茶が飲めるようになっていて、参加者の会話がいつそう親密にスムーズに行われています。

ときどき中国からお土産の菓子などがもたらされたり、珍しい茶葉に出会えます。



各種中国茶

茶を通じて会話を重ねるうちに、自然に中国語の単語や表現も身につきますし、さらには文化的背景、最新の流行なども聞くことができます。中国やアジ

アの中国語圏に旅行や留学を目指す人は、現地の情報を得るためにも、ぜひ一度訪れることをお勧めします。もちろん、中国語の響きが気に入ったり同年代の中国人はどんな感じなのだろうという人も歓迎ですし、中国語の検定に挑戦しようという人にもアドバイスや教材の提供をしています。



ある日の中文茶房

また2011年の12月、大学主催の留学生による各国料理即売イベント「ワールドキッチン」には、中文茶房の有志が「台湾大根もち」という料理で参加しています。日本ではなかなか食べることでできない珍しい料理を提供し好評を受けました。このように中文茶房は、さらにより広い連携・交流活動も視野に入れています。



「ワールドキッチン」の大根もち販売



韓国語カフェ「이야기 (イヤギ)」への誘い

言語教育センター 准教授

李 安九

안녕하세요! (アンニョンハセヨ: こんにちは)

岡山大学には「이야기 (イヤギ)」という名前の韓国語カフェがあります。「이야기 (イヤギ)」とは韓国語で「お話」を意味する言葉ですが、この名前は今年韓国語カフェに参加している学生達が色々な意見を出し合い、投票によって決めたものです。その名前通り、韓国語カフェ「이야기 (イヤギ)」では韓国に興味のある人達が集まって、いつも和気藹々とした雰囲気で楽しいおしゃべりの花が咲きます。

韓国語カフェ「이야기 (イヤギ)」が始まったのは2011年の6月からですが、10月からは一般教育棟C棟4階の「教員ラウンジ」で毎週木曜日の16時から18時頃に開かれるようになりました。

岡山大学は韓国の成均館大学、江原大学、高麗大学、国民大学と協定を結んでおり、半年から1年間の交換留学生をお互いに派遣しています。毎年8月には成均館大学で韓国語短期研修プログラム(12人参加)を、2月には岡山大学で日本語短期研修プログラム(12人参加)を実施しています。

韓国語カフェ「이야기 (イヤギ)」には夏の韓国語短期研修プログラム参加者や、半年~1年間の韓国留学を終えて帰ってきた学生達、また韓国人留学生達もたくさんやって来て、韓国語と日本語について質問したり、韓国と日本の共通点や違いについて話したりして楽しい交流の時間を過ごしています。

では、今年の韓国語カフェ参加者の声をご紹介します。

- ▶ 「韓国語カフェでは、留学生の方と楽しくお話をしながら、韓国語を学ぶことができます。たくさん勉強したい人はたくさん質問できる

し、ただ交流をしたい人はお話をするだけでも良いので、とても楽しいです」(文学部2年 女子)

- ▶ 「実際の日常生活での会話なども教えてもらえて嬉しいです」(教育学部1年 女子)
- ▶ 「いろいろ韓国語を教えてくれるので、勉強をもっと頑張ろうという気になります」(文学部1年 女子)
- ▶ 「韓国の文化や生活事情についても教えてもらったので、短期研修の際にも大変参考になりました。」(文学部3年 男子)

いかがですか? 今後、韓国語カフェ「이야기 (イヤギ)」では韓国語の歌を歌ったり、韓国の映画やテレビを見たり、韓国の文化体験をしたり、一緒に楽しい時間を作っていきたいと思っています。韓国語に自信が無くても大丈夫です。韓国に興味のある人、韓国人と友達になりたい人はぜひ韓国語カフェ「이야기 (イヤギ)」にお越しください!



韓国語カフェ参加の皆さん



ド イ チ ャ ー シ ュ タ ム テ ィ ッ シ ュ

Deutscher Stammtisch

(ドイツ語カフェ) の試み

言語教育センター 教授
久保田 聡

ドイツ語では、カフェやレストランで馴染みの客たちが囲むテーブルのことを「シュタムティッシュ」と呼びます。初修外国語科目として教室で学んだドイツ語が実際にどれくらい使えるものなのか試してみたいと思う日本人学生も、ドイツ人留学生も、さらにはドイツ語学習経験のある留学生たちも、「ドイツ語」というテーブルを囲めば、初めて参加したその日から、誰もが「馴染みの客同士」なのです。

シュタムティッシュの始まりは、2010年4月のこと、一人のドイツ人留学生が、ドイツ語を学んでいる日本人学生とぜひ知り合いになりたい、彼らがどんなふうにドイツ語を話すのかぜひ聞いてみたいと言って来てくれたことがきっかけでした。一人り、また一人と集まって来たものの、最初のうちは「こんにちは (グーテンターク)」、「私の名前は… (イッヒハイセ…)」からあとが続かなくて、しばし沈黙という状態でした。それでもコーヒーや紅茶を飲んだり、お菓子を食べたりして過ごしているうちに、少しずつ少しずつ、「シュタムティッシュ」本来の、打ち解けた雰囲気が生まれてきました。そもそもここは「教室」ではなく「カフェ」なので、間違いを恐れて緊張の連続なんて、変ですよ。実際、みんなの様子から、言葉がどんなにたどたどしくとも気持ちはちゃんと通じるものだとしたこと、そして気持ちが通じ合った時、日本人学生のドイツ語も、ドイツ人留学生の日本語も、共にめきめき上達してゆくことをつくづく実感することができます。

それから1年半が過ぎ、「シュタムティッシュ」の人の輪は、メンバーの入れ替わりはあるものの、徐々に広がっています。2011年度後期現在、一

般教育棟C棟4階の「教員ラウンジ」で毎週月曜日の16時から19時に開かれる「シュタムティッシュ」には、ドイツ人留学生3人(ドレスデン工科大学2人、ボーフム・ルール大学生1人)とフランス人留学生1人が、文学部を中心に、1年生から博士課程に至る、ドイツ語学習中の10人あまりの学生と、わいわいがやがや楽しい時を過ごしています。

サッカーファンも若干名。故郷の町のチームに加えて、住んでいる町のチームを応援するのがドイツの流儀とあれば、連れだって「ファジアーノ岡山」(岡山がフランチャイズのJ2チーム)の応援に出かけるのも自然の成り行きです。

まずはお互いを知ること—これこそが「コミュニケーション上手」を目指す「カフェ」の試みにほかなりません。



カンコースタジアムにて

岡山大学を卒業された方に、
本学在学の方達へのメッセージをお願いしました。
皆さんの大学生活に役立てていただければと願っています。

岡山での9年間

ちょう う
張 羽

ライト電業株式会社岡山支社
2008年 理学部生物学科卒業



私は2002年の秋に来日し、岡山市内の日本語学校で1年半日本語の勉強をした後、2004年に岡山大学理学部生物学科に入学しました。

大学での4年間は、たくさんの知識を身につけ、多くの友達ができ、貴重な経験を積むことができた、本当に充実した時間でした。

私の故郷の大連は中国でも日本語教育のレベルが高いことで有名な町です。私も中学校から高校までの6年間、英語には全く目を向けず、ひたすら日本語だけを学びました。成績も良かったので日本語については自分なりに自信を持っていました。しかし、実際に日本に来てみると、中国の教科書で習った日本語はほとんど役に立ちませんでした。お店などの名前が日本語なのにローマ字で書いてあるので全然読めなくて困ったこともあります。このように色々な不便もありましたが、東京や大阪のような大都市に比べて、のんびり暮らせる岡山の生活が気に入り、すぐに慣れて、留学生活が楽しく感じられるようになりました。今になって振りかえってみれば、大学生活は自由だけれど多忙、楽しいばかりではなく厳しさもある日々でした。授業や実験、さらにアルバイトも入って、常に時間に追われているような状態でした。特に苦労したのは英語の授業です。私は中学校から外国語が日本語だったので、英語の学習経験が全くありませんでした。そんなわけですので、英語が必修科目である理学部を卒業するためには英語の勉強をゼロからスタートさせなければならなかったのです。幸い、外国語教育センター（当時、現在は言語教育センター）の先生と出会い、日本の

中学校の教科書を使ってマンツーマンの指導を受けることができたので、必死に勉強して何とか無事に単位を取ることができました。

やがて大学4年生になって、就職活動と卒業論文が生活のメインイベントとなり、スケジュールと体調管理に気をつけながら必死に頑張りました。もちろん、留学生の私には日本人学生とは異なり、本国に帰るという選択肢もありましたが、日本で社会人になって日本の企業文化を学ぶことができれば、私にとって貴重な経験だと思い、日本で就職することを決意しました。そしてまた、岡山での生活にも、そしてさらには岡山弁にもすっかり慣れていましたので、就職してから岡山を離れるという考えは全くありませんでした。しかし、岡山での就職戦線は予想より厳しいものでした。就職情報が少なく、SPI筆記試験などの対策も充分ではなかったため、最初に志望していた会社からは内定がもらえませんでした。けれども、努力すれば必ず結果につながると信じて、業種を絞らずに興味がある仕事内容からもう一度探し直すことにしました。すると、ライト電業株式会社という、制御・情報機器関係の専門商社と出会いました。私はこの会社が、留学生の長所を生かせる、私にピッタリの職場だと思い、早速エントリーしたところ、幸運にも採用していただくことができたのです。

「学生の方が楽ですよ」—この言葉を学生時代に誰でも一度は耳にしたことがあると思います。私もまた、社会人になってから社会の厳しさを改めて認識しました。学生時代のような「これでいいや」、「単

位を取ればいいんだ」という甘い考え方は社会人には通用しません。もちろん先輩や上司がフォローしてくださることはありますが、みんなそれぞれの持ち場があり、誰にも迷惑をかけないように自分で努力しなければなりません。その努力こそが自分自身の成長につながると思うのです。

私は入社当初から会社の子会社である上海営業所の受発注業務や見積りなどの業務を任されました。小さく言えば私は岡山支店と上海営業所とのパイプ役ですが、大きく言えば日本と中国の「架け橋」になっているという気がして、やり甲斐を感じ、日々の仕事に取り組んでいます。日中両国間の文化の差やビジネススタイルの差もあり、時にはストレスのために潰されそうなプレッシャーを感じることもありますが、違いがあれば共通点もあるはずです。岡

山支店と上海営業所との業務を円滑に行うことが私の仕事であり、「架け橋」の使命なのだとは心掛けています。

やりたいことがやれるという幸せがあります。一方、できることからやっているうちにやり甲斐を感じ



じるという幸せもあります。幸運なことに私は、この二つの幸せを同時に味わっています。この幸せの原点は岡山大学に入学し、卒業できたことであり、今も第二のふるさと岡山に暮らしていることなのです。

私の大学

ワン ウェイ
王 薇

CANホールディングス株式会社
2010年 大学院社会文化科学研究科 比較社会文化学専攻修了



「私はカザン大学に学びにゆく」ー1923年に発表されたマキシム・ゴーリキーの自伝的小説『私の大学』はこのように始まります。周知のように、主人公は大学への憧れを胸いっぱい抱きながら、社会という大きな「大学」に入りました。主人公と比べたら、私は自分が随分幸せだと思わないといけません。と思いました。

私は、2003年に中国の杭州から日本に来て、岡山大学に入学した2004年から岡山大学大学院を修了した2010年までの6年間、岡山に住んでいました。そして、ゴーリキーの言う「社会大学」に入ってから、岡山に住み続けています。

何故かというと、岡山の企業に就職することができたからです。私にとって、岡山は第二の故郷で、住み心地が非常に良い町です。岡山大学を卒業してからも、週末に大学へ行って、散歩したり、銀杏並木道を眺めたりしながら、学生時代のことを思い出すのが楽しみです。岡山大学で6年間の留学経験を持ち、今は日本の「社会大学」に入って勉強し続けています。

社会人になって一年半です。会社はCANホールディングス株式会社という有機肥料のメーカーで、去年中国の大連に工場を建設するという話が持ち上がったことから中国語ができる人材が必要となり、

私が採用されました。主な仕事は、日中スタッフ間のコミュニケーションの窓口として連絡したり、双方の資料や報告などを翻訳したりする作業です。そして、大連への出張は勿論入ります。そんな私が、外国人として日本の会社に入って、そこで感じたことを少し述べてみたいです。その中でも、日本の人の「優しさ」と「曖昧さ」をピックアップしたいと思います。

私自身は外国人だという意識を持っておらず、同じ「人間」という立場で日本の同僚たちと接したいと思っています。しかし日本人は優しく、入社当初、「漢字分かるよね?」、「カタカナ大丈夫よね?」、或いは資料を持ってきて小さい声で「これ、読んでわかるよね?」などと言ってくれたりして、とても気をつけてくれます。一回、二回ならば、「はい、大丈夫です」と答えましたが、何回も心配されると自分も「私の日本語って大丈夫かな」、更に「ちゃんと仕事できるかな」と不安になってきたりします。幸いなことに、時間が経つと共に、私の日本語がようやく認められて、そういう心配が減ってきました。今度は日本語ではなく、言い方や振る舞い方を注意して頂けるようになりました。今となって日本人の同僚に直接聞いてみたら、日本人は異質の者にどう接すればよいか分からないという答えをもらいました。やっぱりそうだったのかと私は思いました。実は、学生の時、同じような経験がありました。優しい友達がわざわざ「分かり易い」日本語を話してくれたり、気をつけて分かり易い言葉を選んでくれたりしていたのです。学校でも会社でも「外国人」として気をつけてもらっているのですね。そういう優しさを受けた私は、嬉しいですけど、時と場合によっては、傷つけられてしまうことがあります。「わざわざ」でなく、普通に接してくれるのが一番嬉しいことなのにと私は思います。

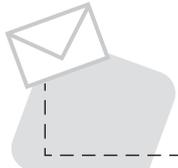
そして「曖昧さ」—これも日本文化について必ず言及される側面ですね。さすがに日本に来てから9

年目になりますので、ストレートに言わずに婉曲に表現する日本語には慣れているものの、自分自身はまだまだ使いこなせません。学生の時にはそんなに問題にならなかったですが、会社に入ったとたんに、苦労の連続です。私は日本と中国の橋渡しのような仕事をしているため、両国の文化の壁を非常に強く感じています。通訳にしても、翻訳にしても、「曖昧」な日本語をどうやって正確に「ストレート」な中国語に変更すればよいか、私はいつも悩みます。

文化というものは、良いか悪いか、進んでいるか遅れているか、という問題ではなく、単に「異なる」だけなのです。違う文化に興味を持ったり、理解しようとしたりすることが、「異文化交流」になると思います。違う文化背景、違う常識、違う考え方を持つ人達が一緒に仕事をする時、「異文化理解」ということは、特に大切だと切実に感じています。それに、本当の「異文化交流」や「異文化理解」は、言葉だけではなく、行動や表情や口調なども手段ですから。更に言えることは、考え方が違う、やり方が違う、常識が違うからと言って、互いに譲らなければ、仕事が進まないのです。学校での「異文化理解」が目的だとするならば、会社での「異文化理解」は手段だと思います。仕事がスムーズに進む手段です。

社会人になって一年半で、まだまだ経験が浅いと思います。岡山大学を卒業したけれども、「社会大学」には入ったばかりです。この大学を卒業するのは、はるか先のことでしょう。みんなそこで勉強し続けるのですから。

「日中交流」という言葉を、よく耳にします。私が今やっている仕事もその範疇に入るかなと、時々考えています。平凡な一人ですけれども、自分なりに「日中友好」を理解して、頑張っていきたいと思っています。



海外の教育紹介

南アフリカの大学

Introduction

One's life is a journey that is formulated and built on daily experiences over years. These massive encounters become learning experiences that can be shared for various purposes. It even becomes more interesting if those experiences are unique. The uniqueness of my life journey is based on being born and bred in South Africa during apartheid era. This article intends to introduce myself through sharing my educational experience and its challenges and how these challenges have motivated me through perseverance in a country with diverse population and cultures.

はじめに

人生とは長い年月にわたる経験によって形作られる一つの旅です。旅での多くの出会いは、様々な目的に対して共有できるような学習経験となります。それらの経験が独特であれば、よりいっそう興味深いものとなります。私の経験の独特さは、アパルトヘイト時代に生まれ、育ったことにあります。この記事において私の教育的な経験とその課題、多様な民族と文化を持つ国の中でこれらの課題をどのように克服してきたかをお話します。

Schooling

The medium of instruction at my primary school was in English and at the junior secondary school changed to be Afrikaans (Dutch origin) as they had taken over the country from the British colony. This became a big

大学院教育学研究科 教授
テムビ コンスタンス ンデララーネ
Thembi Constance Ndlalane



challenge especially because at High school I had to do all the subjects in English. Fortunately, I was in a prestigious high school and I managed to make up the transition of subject concepts from Afrikaans to English.

学校教育

小学校は英語が使われましたが、イギリスの植民地から独立したので、中学校からはアフリカーンス（オランダ語）に使用言語が変わりました。これは大きな障害になりました。なぜなら高校からはすべて英語で授業をとらなければならなかったからです。幸運にも私の高校はよい学校でアフリカーンスから英語への移行をスムーズに行えました。

Tertiary Institutions

I went to an ethnic university with most lecturers being Dutch speaking for my junior degree and teaching qualification, after which I started teaching. My school experience and my perseverance made me to be a solid teacher as I became the best teacher of the year and awarded a scholarship by the British Council to study in England and this motivated me even further as I continued to study. At Chelsea College in London, I worked with Prof. John May, Mr. Mattock and Prof. Black who were experts in Science Education. We were engaged to practical work and experiments that I had not done in my own country before. I got another British scholarship for furthering my studies at Leeds University and that is where I developed the love of

developed teaching materials for the trainees that were suitable to the South African context considering the demands of curriculum 2005 as it was called.

JICAの経験

5年間にわたる南アフリカ・ムプマランガ州のプロジェクトでは、プレトリア大学と鳴門教育大学が連携し理数科の高校教員の授業改善に取り組みました。このプロジェクトの期間に私は鳴門教育大学に数回訪れ、喜多教授（現岡山大学）、小野教授、小澤教授（鳴門教育大学）と一緒に仕事をしました。日本での経験（学校訪問や南アフリカのカリキュラム2005に沿った教材や教員を訓練する指導主事向けの教材を開発）は私にとって大変役立ちました。



South African teachers in Naruto-2004
(2004年の鳴門での研修)



Prof. Kita demonstrating Chemistry experiments
(喜多教授の化学実験演習)



Prof. Thembi Ndjalane facilitating the South African teacher training workshop in Naruto-2004
(テンビ・ンデララーネ教授が2004年の鳴門での研修で南ア研修員と議論をしているところ)

UNESCO's International Capacity Building in Africa (IICBA)

University of Pretoria, through UNESCO-IICBA had to conduct leadership training for women leaders in 15 countries in Africa within 3 years. I was appointed to do this training as a lead trainer and I managed to visit 14 countries training women on leadership skills and listening to the challenges they face as leaders. I conducted one week workshops that had major emphasis on achieving the African Millennium Development Goals by 2014 as declared by the United Nations. This exposure enriched my knowledge and understanding on women issues in Africa and for me this has been one of my greatest contributions towards the development of Africa.

ユネスコの 아프리카における国際能力開発 (IICBA)

プレトリア大学はユネスコ IICBA の委託を受け、3年間アフリカの15カ国において、指導者研修を実施しました。私は筆頭訓練者として14カ国で女性の指導者技能訓練と、指導者として彼女たちが直面している課題を聴取しました。私は1週間の研修会を開き、

国連によって公布された2014年までに達成すべきアフリカ1000年開発目標について主に扱いました。これによってアフリカにおける女性問題に関する知識と理解を深めると同時に、アフリカ開発に向けて私の行った貢献のもっとも大きなものであります。

University of Pretoria BAT project

The University of Pretoria had a project that was intended to help teach a mosquito stricken community in an area next to Mozambique and South Africa border not to kill the mosquito-eating bats. The training was based on the protection of bats. A bat eats at least 1200 insects per hour and thus it helps to reduce the number of mosquitoes especially those that are Malaria carriers. My role was to educate teachers, parents and school children on how to protect bats.

I realized the importance of education in working with illiterate community people as far as ecosystem and biological food chains are concern especially as they relate to the negative beliefs and misconceptions about bats in the community.

プレトリア大学のコウモリプロジェクト

プレトリア大学は、モザンビークとの国境近くの地域においてマラリア蚊を食べるコウモリの保護プロジェクトを実施しました。コウモリは1時間に最低1,200匹の昆虫を食べ、マラリアを媒介する蚊を減らすのに貢献しています。私の役割は、教員、保護者、生徒にコウモリの保護の意義と保護の方法を教育することでした。文盲地域の人々にコウモリについての悪い迷信や誤解を改めさせ、生態系や食物連鎖を通してコウモリの保護の大切さを伝えたのです。

Research Interests

Having been exposed to a variety of experiences, my research varied from Instructional practices in the classroom, teacher training and development to social and community work. Most of my work have been shared in international annual conferences where I am a member, like the American Educational Researchers' Association (AERA); Comparative Institute Education Society (CIES); Southern African Association Researchers of Science, Mathematics and Technology Education (SAARMSTE) to mention a few.



Dr.Thembi Ndlalane training youth on howto protect bats
(テンビン・ンデララーネ博士が若者にいかにコウモリを保護するかを研修している)

研究テーマ

様々な経験をしてきましたので、私の研究は教室での教育実践から教員研修や社会・地域の開発まで多岐にわたっています。私のほとんどの研究は私が会員である国際学会で発表しています。例を挙げれば、アメリカ教育学会 (AERA)、比較教育学会 (CIES)、南部アフリカ理科、数学、技術教育学会 (SAARMSTE) などです。

Conclusion

I have attempted to introduce myself by sharing my personal experience based on some key events in my life although there are many more but my emphasis was perseverance and motivation that pays at the end. Some of my peers who could not tolerate the *apartheid* practices in South Africa then either went on exile, quitted schooling and are now less productive citizens. From this journey of experiences, I use the analogy “*that it is better to light up a ‘candle’ while waiting for ‘electricity’ than to throw it away and stay in the dark. The ‘candlelight’ will be dim but it will show some path to go while waiting for the electricity to brightly light up the way.*” The *apartheid* education provided me with the ‘*dim candle light*’ that led me to 1994 where Nelson Mandela provided ‘*electricity*’ (educational and social opportunities for all South Africans in a democratic country.

まとめ

私の人生の大きな節目を交えながら私の個人史の紹介をしました。私の同僚にはアパルトヘイトの中で脱落したり、辞職したり、非生産的な市民になった人もいます。この経験の旅で私は次のような比喻を使います。

「停電して電気の回復を待っているとき、暗闇でじっとしているよりもろうそくをともし方がよい。明るく道を照らす電気が回復するのを待っているよりも、ろうそくの明かりは暗いが、行くべき道を照らす。」

ネルソン・マンデラが電気（民主的な国家におけるすべての南アフリカの人々に教育と社会的な機会）を与えた1994年までのアパルトヘイトの教育は暗いろうそくの明かりでした。



The Beat Team

- **Dr. t. Ndlalane**
Senior Lecturer at the Education Faculty (UP)
- **Nigel Fernsby**
Chairman of the Gauteng Bat Interest Group
- **Rudi Horak**
Curator of the Discovery Centre @ TUKS (UP)

プレトリア大学コウモリプロジェクトの研究者と共に

編集後記

「教養教育magazine」という副題とはうらはらに、本誌OU-Voiceは教養教育のみにとどまらず、岡山大学の教育全般に関わる現状、課題および展望を取り扱ってきました。それはまさに本学教育開発センターの役割の軌跡を反映するものに他なりません。それならば、もうそろそろ本誌の副題を改めてもよいのでは、という話が委員会で持ち上がりました。そこで第14号からは装いも新たに「岡山大学教育マガジン」として、「国際化」をテーマに据え、Voiceでは国際センターに登場いただき、特集では留学生との交流の場である「カフェ」を紹介しました。そして卒業生メッセージも、岡山市内の企業で活躍する元留学生おふたりからの近況報告です。

不況の中、とかく「内向き」になりがちな当世学生気質ですが、「内」ばかり向いていても結局「内」のことはわかりません。「外の世界」を知ってこそ「内」のことも理解できるし、元気も出るのではないのでしょうか。外国語上達もまた然り、相手に対して大きな声で元気に挨拶のコトバを発するところから道が開けると思うのです。

言語教育センター教授 久保田 聡

編集担当

教育開発センター広報専門委員会

久保田 聡、橋ヶ谷 佳正、紀和 利彦、矢野 正昭、天野 憲樹、八木 隆徳

表紙図案構成監修

橋ヶ谷 佳正

学務部学務企画課

バックナンバー

- No. 1 特集：「新カリキュラム・教務システムについて」
- No. 2 特集：「上限制」
- No. 3 特集：「授業評価アンケート」
- No. 4 特集：「外国語教育の在り方」
- No. 5 特集：「望ましい授業とは」
- No. 6 特集：「成績評価の在り方」
- No. 7 特集：「教養教育に求めること」
- No. 8 特色GP紹介、学生・教職員教育改善委員会活動報告 他
- No. 9 新しくなる教養英語教育、現代GP紹介 他
- No.10 20年度入学生から始まるGPA制度、特集：「大学ではこう学ぶ」 他
- No.11 学生支援の立場から見た教養教育、特集：「使ってみよう岡大eラーニング」 他
- No.12 アドミッションセンターの活動、特集「大学ではこう学ぶ」 他
- No.13 社会にはばたく岡大生のためのキャリア開発センターを目指して、特集「学士課程教育構築」 他

上記は、OU-Voice ホームページ

<http://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/ou.html>

よりご覧いただけます。

OKAYAMA
UNIVERSITY



OKAYAMA UNIVERSITY

岡山大学 OU-Voice 第14号

編集・発行

岡山大学教育開発センター 広報専門委員会

所在地・連絡先

岡山市北区津島中2-1-1 〒700-8530

電話：086-252-1111（代表） Fax：086-251-8440

E-mail：gkikaku@adm.okayama-u.ac.jp